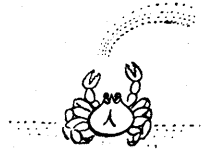


# 虹とカニ

坪田 譲治



柿の木の下で、一ビキのカニが、両手のつめをさし上げていました。ぼくは、これを見つげると、これはへんだなあと、おもいました。それで、カニにきいてみました。

「どうしたの、カニさん。」

「虹だよ。」

カニが言いました。

「虹？」

みれば、むこうの空に、きれいな虹が出ていました。

「きれいだね。」

ぼくは言いました。

「鳥もとんでる。」

カニの言うとおり、虹の上に、一羽の白い鳥が、はねをうってとんでいました。

「ほんとうにきれいだ。」

ぼくはカニといっしょに、しばらく、その虹と鳥をながめました。それにしても、カニはいつまで両手のつめを高々と上げているのでしょうか。ぼくは聞いてみました。

「なぜ、そんなに手を上げているの。」

カニは言いました。

「それでは、ぼく、手をさげてみようか。」

「うん、さげてごらん。」

「じゃ、さげるよ。さげると、虹がきえていくよ。」

そろそろ、カニはつめを下にさげました。それにつれて、ふしぎなことに、虹がすうっと消えて行きました。

「あああ。」

ぼくはふしぎな気がして、つい、そう言ってしまうました。カニのつめが下りてしまうと、虹がまったく無くなっ

て、あとは一めんのおおい空になりました。鳥もみえませ  
ん。

「ね、わかった！」

カニが言いました。

「うまいねえ。」

ぼくはかんしんしました。そこでまた言いました。

「では、もう一ぺん虹を出してごらん。」

カニはそろそろ両手のつめをあげました。ばんぎいの形に  
上げたのです。すると、あおい、むこうの空に、高々と七い  
ろのニジが、ふでで画いたようにでてきました。

「あれっ。」

鳥もとんでいます。

「一わ、二わ、三ば。」

七わも、大きな白い鳥が、はねをうってとんでいます。

虹の上を、上になり、下になりして、鳥はとんでいます。

ぼくはすっかり感心して、ひどく首をかしげていました。す  
ると、その時です。

「はっはっはっ。」

大きな笑い声がありました。びっくりして、その辺を見まわ  
しましたが、だれもおりません。

「だあれ？」

大きな声でよんでみましたが、ふしぎなことに、今まで、  
目の前に見ていた、あのカニも、あの柿の木も、あの空も、  
あの虹も、それから七わの白い鳥も、みんななくなってい  
て、ぼくは、学校からの帰り道でした。川岸の道を歩いてい  
るのでした。

ゆめだったのでしょうか。いつか、どこかで、聞いた話を  
思い出していたのでしょうか。考えてみても、わかりません  
でした。とにかく、美しい虹の景色でした。

X

#### 解説

これはカナ童話、幼年向き童話として、十何年か昔、  
私が書いたものであります。これを読まれる人は、一枚  
の屏風を頭に思い浮べ、そこに一本の柿の木と、その根  
元に一びきのカニがいるところを想像して下さい。もし  
て次ぎ次ぎと、そのカニが動き、空に虹のできてゆく有  
様を、その屏風の上に、頭の中に描いて下さい。つま  
り、この作品は心に描く絵というわけなのです。字で描  
いた絵というわけなのです。だから視覚的であり、美し  
くもなければなりません。その点を鑑賞して下さい。